

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.7

あれは夏の暑い日でござった。点徳幼稚園も夏休みということで、早朝のラジオ体操から帰られた援姫様は朝食代わりと甜瓜まくわうりを頬張り、金沢名物「ドジョウのかば焼き」を7、8本も握りしめると「ちえん（支援）、ぼすけ（ご助）、朝駆けちゃ。馬（三輪車）引け。」とのたまわり、拙者らがお引止めする暇も与えず、いつものようにお城近くの殿町（現：大手町）に向け、はや、馬（車）上の人となられたのでござる。

またかぁ・・・と消沈しながらも、見失っては一大事と、拙者のご助は愛車「パープスチール」と「ブルーインパルス」を引き出しますと、秘伝の三角乗りで操り、姫様を追いかけたのでござります。



三角乗りの唯一の弱点、伸び切った腕でのブレーキが難しい。加速するパープ。

「南無さんっ！ ご助よ、ブレーキを頼むっ」と大声で叫べどもパープの加速は増す一方。

「旦那様あああ・・・ブレーキでござるよおおお」と背後で小さくなるご助の声を聞いたような。

まさか？・・・恐るおそる後ろを見れば既にご助の姿は無く、荷台から伸びたロープが馬の背を打つ鞭のように「ピシピシッ」と兼六坂を叩く小気味の良い音だけが無常に響いておりもうした。



一刻後、拙者は兼六園下の土産物屋で、パープが破壊した九谷焼の壺などの損害調査に追われておりもうした。されど不幸中の幸い、不慮の事故で生じた損害については個人賠償責任保険でござる（VOL5. 6 参照）。先にも一度、経験しておる拙者はテキパキと始末をすませ、通りへと出ると石川橋に向かい紺屋坂をのぼり始めたのでござる。

紺屋坂をのぼり切り、峠の茶店の前で大息をついておりもうした拙者に「遅いでござるよ旦那様。」とご助。

「何をっ！貴様のせいで姫様を見失うばかりか・・・」と叱る拙者を制し、

「旦那様。姫様は玉泉院丸でござる。」とご助。

「なに、でかしたご助。姫様を見つけたか？」

「勿論でござりますよ。はなっからお城に着いたら旦那様にはお休み頂き、姫様の搜索は小回りの利くブルーインパルスで私がお探し申し上げようと思っておりました。旦那様にこのような雑用をさせられませんぜ。」

「むむむ、そうか、それで城に着くまでは拙者に引かせておったのか、可愛いことを言うではないか。」と、ご助を叱ろうとした拙者の不徳を深く恥じた次第でござった。

さて、石川門をくぐり、金沢城橋爪門から二の丸広場を抜け、玉泉院丸に至り尾山神社を臨むと新たな名所、鼠多門が出来ましてござる。

援姫様はその門の先、多門橋をキコキコと三輪車を漕ぎながら行き来しておりました。

姫様は拙者のご助の姿を認めると、手にした湯涌温泉名物塩サイダーを飲みながら「おちよいぞちえん。わらわを土佐守の屋敷まであないせよ。ほれ、ちおちゃいたーちゃ。」とサイダーの瓶を下されたのでござるよ。



「ははっ、それご助。」と瓶を持つよう命じるため振り返ればご助の姿は無く、
「姫様。こちらでござる。」と先になり尾山神社の境内へと駆け去るご助と「き
ゃっきゃっ、ぼすけまちゆのじゃ。」と追いかける姫様。

一人、鼠多門橋に取り残された拙者の頭上を真夏の風が・・・ひよおおおー
とサイダーの瓶の口を鳴らす真夏の風がいつまでも吹いておりもうした。

^{たたず}佇むことおよそ半刻近く。仕方なく、姫様が残した塩サイダーの瓶を背に担
ぎ、トボトボと土佐守様のお屋敷を目指し、歩き出したのでござるが真夏のお
日様はジリジリと容赦なく拙者の体を照らし、さらに歩くこと半刻、ようやく
土佐守様のお屋敷近くに差し掛かった頃、今度は背中からパチパチという音が
聞こえ始め、背中が暑くなりもうしたのじゃ。

そういえば先代様の奥方様が当代の守様が幼子のころに、兎どんと狸どんの
カチカチ山の昔話をなされておったが・・・と懐かしく思い出しておったのじ
ゃが、ふと振り返ると旗指物の柄がパチパチと燃え出しておったのでござる。

「な、何事か?!」訳も分からぬが、咄嗟に拙者はお屋敷の前を流れる大野庄
用水へと飛び込み難を逃れたのでござるが、更に苦難は続き、瓶もろともに用
水を下流へと流されたのでござるよ。



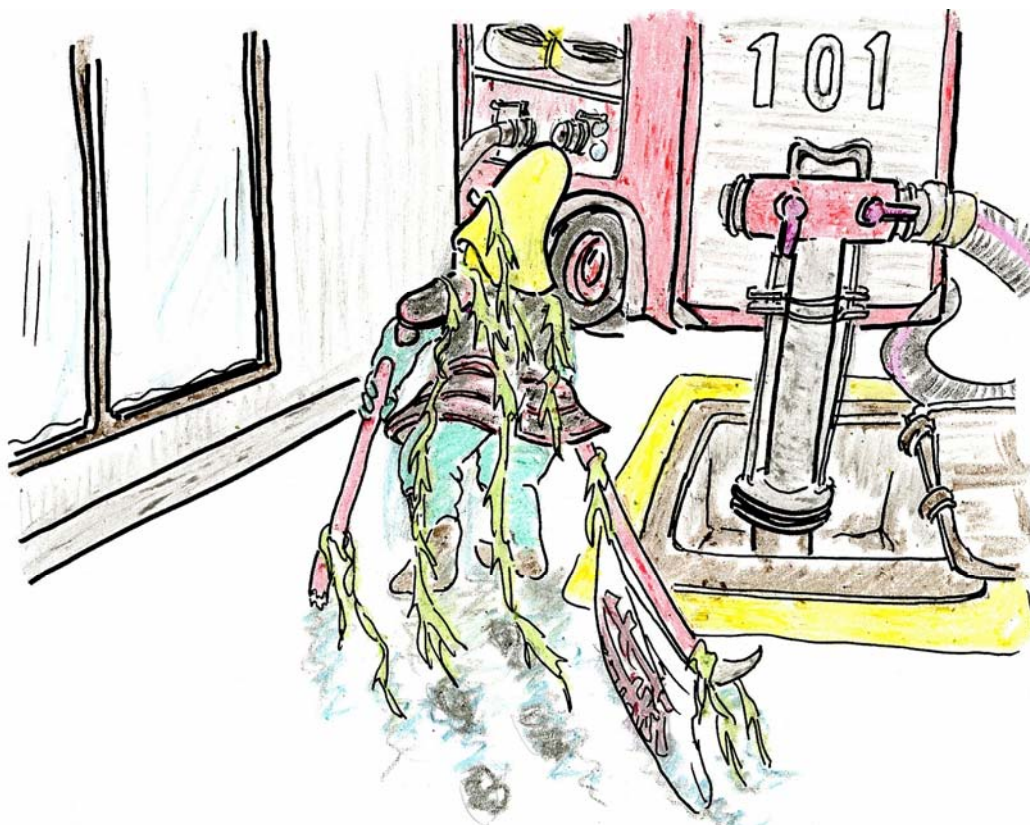
幸い、六枚町の溜まりで資源回収のおじさんに拾われ地上に引き上げられた拙者は一昼夜を掛け市民家に戻ったのでござるが、その道すがら火の気のない二階の寢室から火事になったという一軒の火災現場に出くわしましてな。

消火活動を終えた消防士さんが「収斂^{しゅうれん}火災かもしれない。」と言っておりもうした。

「収斂火災？・・・どこかで聞いた記憶が・・・」と火災予防マニュアルを開いてみますと・・・

収斂発火災とは、凸^{とつ}レンズ状の透明な物体、あるいは凹^{おう}面鏡状の反射物が太陽光を収束させ可燃物を発火させる火災とありもうした。

凸レンズ状の透明な物体で火災になるとはのう・・・その時でござった。拙者の背中で旗指物が燃えたのは塩サイダーの瓶がレンズの代わりをしたのだと気づいたのでござる。



真夏・・・いや、真夏ではなくても太陽が差し込む窓際に透明な瓶を置き放しにすると、収斂された太陽光の焦点が合ってしまうところに燃える物があると火災の危険があるということじゃ。

早速帰って、市民家の点検のし直しをしなければ・・・拙者は熱傷 | 度の火

傷で痛む背中を金沢神社の御手水で冷やすと家路を急いだものでござる。(つづ

く)

